

山梨県南都留郡山中湖村長池地区における 集落構造に関する考察

佐井 倭裕¹・福島 秀哉²・中井 祐³

¹非会員 学士 東京大学大学院工学系研究科 社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:sai@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²会員 修士(工) 東京大学大学院助教 工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

³会員 博士(工) 東京大学大学院教授 工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

山梨県南都留郡山中湖村長池地区では、集落空間を活用したまちづくり活動や村内の道路の整備の議論が進められている。本研究では、長池の集落構造について、生業の変化と道に着目して調査・分析を行った。昭和30年代の農業から観光業への生業の変化、車の交通量の増加に伴った道路の舗装を契機に、集落構造が大きく変化し、現在の集落構造が形成されたことを明らかにし、土地の地割や所有形態と社会構造に関わりについて考察を行った。

キーワード: 山中湖村・集落構造・土地所有形態・生業・道・社会構造

1. はじめに

(1) 背景と目的

山梨県南都留郡山中湖村では現在、富士山の世界文化遺産登録を契機に、住民参加のまちづくりを伴った湖畔景観の改善や村内の道路整備が進められている。農村集落としての集落空間の面影を残す長池地区においても、特徴ある集落空間をいかしたまちづくり活動が住民主体で進められる一方、車両交通の利便性向上や安全面の観点から、集落内の道の拡幅などの議論も行われている。まちづくりや道路整備に向けた議論の場においては、関係者が集落の構造や地域の歴史に関する認識を共有する必要がある。長池集落の道は、かつて農作業や山仕事で用いられた農道や、堀を埋め立てた道、車の利用が増え拡幅や舗装等の整備が行われた道など、それぞれに異なる履歴を持つ。長池地区の集落構造、道の変容過程について民俗学や郷土史の既往研究において、断片的な情報はあっても、まとまって整理された資料はない。

長池地区の所有形態や地割、および道のネットワーク構造は非常に特徴的である。もともと少数の家で土地を分け合い、山仕事や農作業を複合的に行う事で集落範囲を拡大させずに生活してきた集落であり、住居や田畑として利用する土地の所有形態、それらをつなぐ道の形態は社会構造と密接に関わりあっていたと

考えられる。

以上より本研究の目的は、道と土地所有形態に着目し、生業の変化や社会構造との関係性を整理した上で、長池地区の集落構造を明らかにすることとする。

(2) 研究手法

長池地区には地域の歴史に関する文献資料が整理された形ではほとんど残っていない。本研究では、山中湖村史を初めとする郷土資料を基本に、土地登記簿や道路台帳などの行政資料を用い、補足的なヒアリング調査を実施して研究を行った。

具体的には集落の生業の変遷について、村史などの文献調査および地域住民へのヒアリング調査により情報を収集し、集落構造については国土地理院発行の旧版地形図や行政資料を用いた。

また、ヒアリング調査において、集落内の道の使われ方やその変化、道の拡幅や舗装が行われる前後の集落の変化に加え、土地の所有形態や地域の活動およびそれを支える組織などについて話を聞いた。

本研究で用いた主な資料を表-1に記載する。また、ヒアリングの概要を表-2に整理示す。

表-1 資料一覧

道	行政資料	山中湖村:「公図」明治27(1894)年. 山中湖村:道路台帳.
	地図資料	島正義:「中野村土地宝典」昭和37年製図発行 羽田氏所蔵
		ゼンリン住宅地図(1979,1981,1985,1986,1988,1990-1992,1994,1996,2001,2006,2011)
		国土地理院発行地形図 (1896,1922,1929,1934,1954,1971,2008)
		国土地理院撮影航空写真 (1949,1951,1959,1962,1970,1975)
生業	文献資料	郷土史 山中湖村:「山中湖村史第1〜5巻,資料編」,山中湖村役場,1992
	郷土史	山中湖村:「山中湖村史第1〜5巻,資料編」,山中湖村役場,1992 山中湖村の歴史編集委員会:「山中湖村の歴史」,1996

表-2 ヒアリング概要

	日程	時間	人	年齢	性別	内容
平成26年	10月3日	16:30-18:00	A	60代	男性	長池地区の概要について
	10月16日	13:30-16:00	B	80代	男性	昭和初期の暮らしについて
	10月17日	13:30-16:00	C	60代	女性	昭和初期の生業について
	10月18日	10:00-12:00	D	80代	女性	昭和初期の暮らしについて
	10月19日	15:00-15:30	E	70代	男性	昭和初期の暮らしについて
	11月10日	15:30-18:00	A	60代	男性	昭和中期の暮らしについて
		18:00-20:00	F	80代	男性	今はない道・土地所有について
	11月14日	18:00-20:00	G	70代	男性	長池集落のしきたり・祭りについて
平成27年	11月16日	10:00-12:00	H		男性	集落内の道について
	2月13日	13:00-13:30	A	60代	男性	集落内の道の利用・舗装時期について
		15:30-16:00	C	60代	女性	集落の道の利用・舗装時期について
		16:00-18:00	B	80代	男性	集落内の道の利用・舗装時期について
	3月4日	11:00-13:30	I	60代	男性	観光地化に伴う集落の変化について
		15:00-18:00	C	60代	女性	観光地化に伴う集落の変化について
	5月20日	13:30-16:00	K	70代	女性	土地所有と人付き合いについて
	7月21日	13:00-15:00	D	80代	女性	土地所有と利用方法について
		15:00-16:20	L	80代	男性	イッケの構成の確認

2. 対象地の概要

(1) 山中湖村の概要

明治 8(1875)年に山中湖を囲む平野村・長池村・山中村の 3 ヶ村が合併し中野村となり,昭和 40(1965)年に山中湖村へ村名変更された。¹⁾

周囲をなだらかな丘陵に囲まれている山中湖村は,湖を取り巻くように位置する平野・長池・山中・旭ヶ丘の 4 地区により山中湖村は形成されており,寒冷的な気候と火山灰性の土壌により,寒村の多かった郡内地方の中でも,特に農業に不向きな土地であり,古くから馬を利用した駄賃付けや山仕事,出稼ぎや漁業など様々な生業に従事し生業を立てていた.明治時代には養蚕業に従事したが,第二次世界大戦後に観光業を中心とする村へと変化した.

山中湖村では現在,平成 25(2013)年の富士山の世界遺産登録を契機に住民参加のまちづくりを伴った湖畔景観改善や,道路・広場の景観整備に取り組んでいる.



図-1 長池地区周辺地図(国土地理院地形図平成 20(2008)年測量の 2 万分の 1 図に加筆)

(2) 長池地区の概要

長池集落は元は平野集落の支村と言われ,独立した集落と分かる最も古い記録は寛文 9(1669)年の水帳である. その後も平野村との合併や独立を経て,現在は長池地区として山中湖村の一地区となっている。²⁾

背後を山に囲まれ,平坦な土地が少なく(図-1 参照),郡内の 11 ヶ村の中で最も生産性の低い集落であった長池集落は³⁾,寛文年間にドテシタ 3 軒とよばれる 3 戸から始まったとされ,寛文 9(1669)年に 11 戸,明和 8(1771)年に 34 戸に増えている. 土地が限られていた長池ではほとんど分家を出さなかったため,その後長く戸数の増加が見られず,明治 2(1869)年においても戸数は 34 戸のままであった。^{4) 5)}大正 7(1918)年,区内の入会山の所有名義を切り替えるに際し,新たに 38 戸で登記されたが,現在までこの 38 戸が長池の地域社会の中心的役割を担ってきた。⁶⁾

昭和 40(1965)年頃になると,長池地区においても観光地化が進み,山は別荘地として開発され,集落内では企業向けの寮や保養所が経営されるようになり,農地を持たない分家が可能となった. 現在でも別荘地を除けば 70 戸ほどの集落である.

3. 広域交通網の変化と長池集落の生業の変化

土地の生産性が低く生業の多くが他地域との交流によって成立していた集落の特徴から,広域交通網の変化とそれに関わる生業の変化について整理した.

(1) 近世の広域交通網

山中湖は甲州・駿州・相州の境に位置し,広域の交通網のは図-2のようになる. 郡内領の村々の多くが農業条件に恵まれず,米や塩などの生活必需物資は他地域からの移入に頼っていたため,物資輸送のための甲州街道や鎌倉往還は非常に重要であった。⁷⁾

長池集落でも山中湖村の観光地化の影響を受け、山の別荘地開発や集落内における寮や保養所経営が始まった。これにより長池集落から忍野や谷村などの周辺集落への移動は、これまでの忍草道から湖畔道路中心へ移った。このように、長池集落の生業は広域交通網の変化に影響を受けてきたことが分かる。

4. 生業の変化による集落構造の変容

(1) 長池地区の土地利用と地割の特徴

長池地区の集落構造の概要と、地割および道の特徴について整理する。

a) 土地利用からみる集落構造

寛文 9(1669)年の水帳・山畑水帳の記録から、長池集落の屋敷地・本畑・山畑の位置関係は図-3 のように広がっていたと考えられる。作物は平野と同じく本畑で粟・稗・蕎麦・大豆等、山畑は切替畑で、八反三畝七歩に作物を作り、残り六町歩は芝場として用いられていた。¹³⁾ 山に広がる共有地は馬の餌場や萱場として共有で利用された。

b) 地割の特徴

長池地区の地割の特徴として、屋敷地・本畑・山畑ともに、非常に細かい地割がされていること、これらのうち複数の離れた土地を各家が所有していたことが挙げられる。(図-4 参照)

c) 四字の地割の特徴

図-4 を見ると、字水ヶ久保・不動坂・水ノ元等では他の山畑より地割が細かく規則正しく地割されていることが分かる。

この水ヶ久保・水の元・藤が尾・不動坂の土地(以後四字と記載、図-3 参照)の地割の経緯を述べる。寛文検地によって、長池の土地が個々の「家」に名請されたが、宝永 4(1707)年の富士山噴火により四字の土地は耕作不可能で境界も区別できない状態になり、年貢を村全体の家数割で負担して上納することとなった。しかし寛永期(1748-1750 年)になり再び耕作が可能になったため、四字の土地の一部が寛文検地で各戸が名請していた面に応じた分割が行われた。しかし年貢を平等に収めていたことから、平等な割地を行うべきとの声が上がリ、文政 4(1821)年には残りの土地が、この時は全戸でおおよそ均等になるように割地がなされた。¹⁴⁾ このときの地割により四字の地割の特徴が生まれた。

(2) 集落内の生業の変化

a) 様々な生業と土地利用

気候風土の厳しい長池集落では、農産物は自家消費に充て、別で収入を得る必要があった。そのため古くから山稼ぎや漁業も行われたが、養蚕・稲作・保養所経営などより収入の得られるものへ変化してきた。

長池集落では最も古くて文化11(1814)年には養蚕業を行っていたと考えられる文書が残っている。明治時代中期に、霜に強い桑が入ってきて以降本格的に栄え、関東大震災での住宅倒壊を機に養蚕向けに建替えた

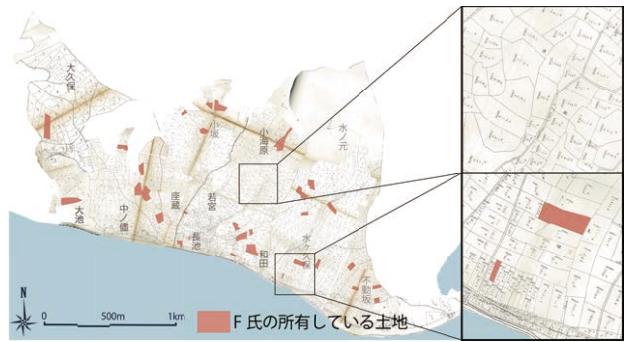


図-4 長池地区の地割と土地所有形態(羽田氏所蔵の中野村土地宝典、昭和 37(1962)年に加筆)



図-5 養蚕が盛んだった頃の土地利用(国土地理院、昭和 4(1929)年測量の 2.5 万地形図に加筆)

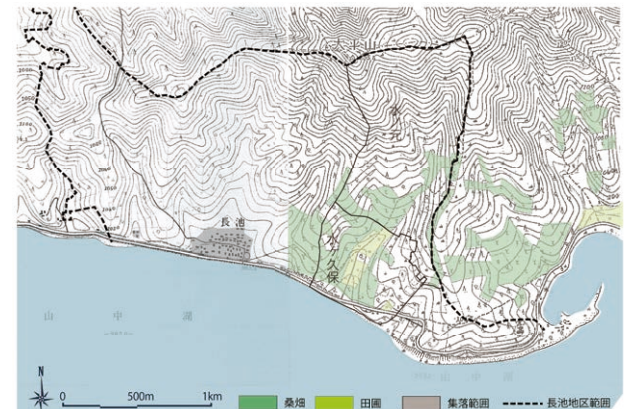


図-6 田圃が出来始めた頃の土地利用(国土地理院、昭和 29(1954)年測量の 2.5 万地形図に加筆)



図-7 昭和 34(1959)年(左)・昭和 50 年(1975)年(右)湖畔道路沿いの建物の建替わり(国土地理院航空写真に加筆)

事でさらに活性化し、昭和7（1932）年～昭和8（1933）年の繭の値段高騰を受けて最盛期を迎えた。しかし戦時中の灯火管制で中断し、戦後は稲作に力が注がれ桑畑が潰された。その後の本・絹の輸出量が激減し、養蚕業が不振に陥り、桑畑が次々と姿を消した。¹⁵⁾ 図-5は養蚕の最盛期直前の土地利用の様子である。

戦後は食糧難から稲作が重点的に行われるようになり、桑畑が水田に変化した。住民で協力して水路を作り、湖からポンプで引き上げた水を田んぼへ流して水田を作った。水利組合が昭和28（1953）年に設立されたが、長池地区で田んぼが作れる平坦な土地は限られており、田圃を持てる軒数は限られていた。地形図からも水田が水ヶ久保に作られたことが分かる。

（図-6参照）

昭和40年代になると観光地化により企業の寮や保養所を営む家が登場し、湖畔道路沿いに南向きにの建物が増加する。（図-7参照）これにより長池集落の住民の多くは安定した現金収入を得られるようになり、農業と兼業する家庭はほとんどなくなった。こうして山畑は使用されなくなり、山には別荘地が建設され、植林がなされた。

b) 集落内の道の変化

このような観光地化の中で山畑が使用されなくなったことで、屋敷地と山を結んでいた集落内の道を利用する機会が減少し、道としての空間は変容していった。例えば蚕の神様へ至る道であった村道平野8号をみると（写真-1参照）、現在では山林と一体化してしまっている。



写真-1 村道平野8号の現在の写真・右は道中にある蚕の神様の祠（筆者撮影、平成26（2014）年）

5. 社会構造と集落構造の関係

長池地区の集落構造の大きな特徴である、地割と土地所有について集落の社会構造の関係の観点から考察を行う。

(1) 長池地区の地割の特徴と社会構造

ヒアリング調査から、長池集落では一軒の家がもつ土地が集落内に離散的に存在することが分かった。（図-4参照）その理由を示す資料は見当たらないが、別のヒアリングから、それらの土地がイッケと呼ばれ

る同族集団内の家同士で近接していることが分かった。（「イッケというのは、まとまって畑はあったんです。（ヒアリング7月21日D）」）

以上から特徴的な地割や個人の土地所有形態さらにはその土地の利用方法において、イッケと呼ばれる長池の社会構造が影響を与えていると考え、イッケを含む社会構造と集落構造の変容との関連性について分析を行った。

(2) 長池地区の社会構造の特徴

長池地区の社会集団としては、地縁共同体である組・クミナイと血縁の共同体であるイッケが存在する。クミナイは向こう三軒両隣の考え方で、古くから、伝達や手伝いの一つの単位とされてきた。¹⁶⁾

イッケとは、先祖の位碑を持つオオオーヤ（総本家）を中心とする同族集団である。「家」の先祖を同じくする集団であり、外から入ってきた者の先祖は加えない。また、縁類が二・三代で縁が切れるのに対し、イッケは何代にも渡って団結力を保っている集団である。

長池地区には7つのイッケがあり、分家の借金や勤め先、縁談など、日常生活を通じても今なお交流が行われている。¹⁷⁾

(3) 社会構造から見た集落構造の特徴

集落構造を社会構造との関係から分析するため、イッケ単位でどのような土地所有形態をしているのかを調査した。

土地所有形態と社会構造の関係を分析する際、本来であれば土地が利用されていた農村期の地割と所有者の情報を元に分析すべきだが、農業が行われていた昭和40年以前の登記情報を得ることができないため、現在の所有形態による分析を行った。まず長池地区のイッケについて吉田による既往研究の成果にヒアリングによる修正を加え、整理を行った。次に山中湖村の平成27（2015）年の土地台帳から各地番の土地の所有者を抽出し、イッケ毎に整理して地図上に色分けしてプロットした。次に村道指定されている道について道路台帳（改訂年は道によって異なる）から始点と終点の位置が特定できるものをプロットした。（図-8参照）

図-8より、先述の水ヶ久保等四字と、それ以外の字では地割に違いが認められ、四字ではイッケ毎の所有にあまりまとまりが見られず、1区画あたりの面積が狭いが、他の字ではイッケ毎にまとまった土地所有の形態が見られた。

これは字ごとの土地の履歴が土地所有形態の特徴として表れているものと言える。

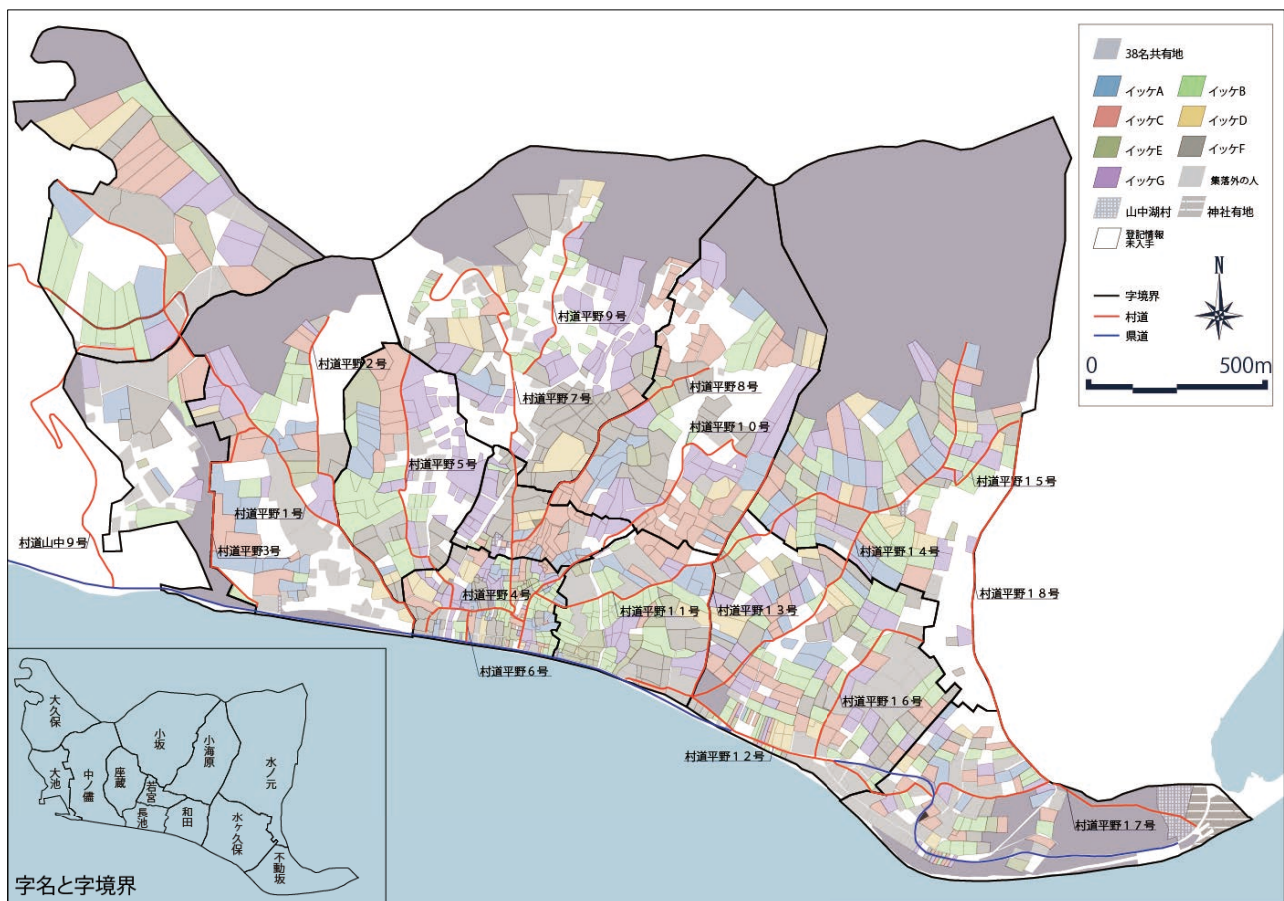


図-8 平成27年(2015)年の土地所有形態と道(山中湖村平成25年地番集成図と平成27年度土地台帳の情報を元に筆者作成)

6. おわりに

本研究の成果と今後の課題は以下の通り.

(1) 本研究の成果

- ・ 山中湖村長池地区を対象として、富士北麓地域における広域交通網の変化と、生業の変化の関係について整理した。
- ・ 屋敷地・本畑・山畑などの集落スケールにおける集落構造と生業の変化との関係について考察を行った。
- ・ イッケに着目することにより字毎の土地の履歴の差が土地所有形態の特徴として表れていることを示唆した。

(2) 今後の課題

- ・ 地割の特徴と地形の関係についての考察
- ・ 道の両側の土地所有形態の違いが、観光地化以後の道の利用頻度低下などの集落構造の変容に与えた影響の考察
- ・ 農村期と現在の土地所有形態の比較により、変容過程の把握、イッケ・土地所有形態・土地利用に与えている影響についての考察
- ・ 本研究成果のまちづくりへの展開

謝辞：本研究の資料調査において山中湖村役場の皆様及び、長池地区にお住いの皆様には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 吉田チエ子：山中湖周辺の民俗-生業-, p19, 岩田書院, 2004
- 2) 同上 1), p10
- 3) 山中湖村：山中湖村史第一巻, p81, 山中湖村役場, 1992
- 4) 同上 1), p10
- 5) 同上 1), p45
- 6) 渡辺洋三, 北条浩：林野入会と村落構造, p329, 東京大学出版会
- 7) 山中湖村：山中湖村史第二巻, p475-478, 山中湖村役場, 1992
- 8) 同上 7), p708
- 9) 山中湖村：山中湖村史第三巻, p759, 山中湖村役場, 1992
- 10) 同上 9), p774
- 11) 山中湖村：山中湖村史第四巻, p27-47, 山中湖村役場, 1992
- 12) 同上 7), p19, 記載の地字とヒアリングの情報をもとに作成.
- 13) 同上 7), p19
- 14) 同上 11), p423-430
- 15) 同上 9), p707-710,
- 16) 同上 1), p20
- 17) 同上 1), p44-45,